

「発達相談」の原点を想う

中部学院大学 別府悦子

「私が杉恵先生のことを書いてい
いんですか？」と本誌の担当の方に
尋ねた。それほど、田中杉恵さんは
多くのお母さんや関係者、教え子た
ちに敬愛されていたので、^{せんえつ}僭越なが
らと思いつつ書いている。読者の方
にはおなじみの「子どもの発達と診
断」(大月書店)のビデオやDVD等に
出演する杉恵さんの発達診断に、私
は1年間大津市役所新人職員として
臨席し、発達相談活動のイロハを学
んだ。今でも発達検査を行っている
最中、新版K式発達検査の「家の模
倣」の課題の提示や子どもがくじけ
そうになったときの支えの入れ方な
ど、杉恵さんの姿が蘇ることがある。

杉恵さんは京都大学を卒業後、大
阪の聾学校で教鞭をとり、田中昌人
さんと結婚後は、近江学園「大木
会」の派遣で、大津市の乳幼児健診
等にボランティアとして関わられ
た。その後、岡山英子さんとともに
大津市職員として、「乳幼児健診大
津方式」の充実発展に寄与された。
今でこそ、各地で心理職が職員とし
て位置づけられているが、それを切
り開いてくださった存在であった。

私は滋賀大学大学院の社会人院
生、つまり教え子として杉恵さんと
再会することになるが、演習で、大

津市役所労働組合による「両先生を
正規職員に」という署名嘆願書のコ
ピーをつけて報告したことを覚えて
いる。

*

とにかく子どもの姿を引き出すの
が上手な先生であった。ことに、4
か月児健診や保育所巡回相談で、「回
転軸可逆操作期」(乳児期前半)の
子どもたちに対し、追視や聴覚反
応、微細な手の動き、そして「人知
り初めし微笑み」まで、自然な流れ
のなかで子どもの最善の姿を引き出
す発達診断であった。そして、緻密
で詳細な記録。子どもの反応や行動
が、小さな字でびっしりと検査記録
に書き込まれていた。それは田中昌
人さんのいう「極微の変化」を実践
している姿とも受け取れた。

杉恵さんから教えてもらったこと
をここでは書ききれないが、よく使
わせていただくのは、子どもの行動
に悩むお母さんへのアドバイスであ
る。「(問題行動は)まるで速度をあ
げた車が曲がり角で急ブレーキをか
けたときに出す、きしみ音みたいな
ものなのよ」。要するに、大きく発
達が変わるときには、(例えばチッ
クや吃音などの)困ったことも起き
やすいので、安心して待つてあげる



写真・北村晋一

田中杉恵さん

たなか すぎえ / 1930年～2006年。
大阪生まれ。54年、京都大学教育学部
卒業。大津市民健康センター発達相談
員を経て、滋賀大学、龍谷大学教授を
歴任。著書に『発達診断と大津方式』
(青木書店)、『子どもの発達と診断』(共
著、大月書店)など多数。

といいですよ、という子育てへの応
援のことばであったのだが、それは
「4歳の節」などの大きく変わる時
期を前にした子どもたちの実証的デ
ータ(エビデンス)や理論がベース
になっている(障害者問題研究第46
巻第2号の白石正久論文に詳しい)。

困った行動を「子どもの強みー弱
み」という特性分析を通してのみ解
釈したり、それを短期間で取り除く
ことを目的とする指導アプローチが
盛んであり、それに振り回されてい
る自分に気づくこともある。こうし
て杉恵さんのことを思い返す機会を
いただいたことで、発達相談員とし
ての原点に戻って実践や研究の向上
に精力を注いでいきたいと思う。

(べっぴ えつこ)